

彩の歳時記

令和 一年 九月

秋きぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる (古今169)

九月の声を聞くと秋到来のような気がしますが、旧暦では九月は晩秋、因みに七月は初秋、八月は仲秋。歳時記の暦では、一・二・三月が春、四・五・六月が夏十・十一・十二月が冬で正月が初春になります。風が静かに吹き、日が沈む夕暮は空が「青から赤へ」と刻々と変わりゆき、グラデーションのような模様にも季節の移り変わり、秋の気配を感じます。過ぎゆく夏に思いを残しつつも、秋の夜長、落ち着く時空間の中で、日々の暮らし、来し方行く末に思いを巡らせてみたいものです。

九月の暦

長月ながつき 夜長月よながつきの略 稲刈月いなかりつき 菊月 雨が多く降るので長雨月ながめつきとも。

一日 防災の日 1923年の関東大震災(死者行方不明者14万人以上)を教訓として、防災の意識向上のために1960年に制定、毎年全国各地で防災訓練が行われる。88年後に起きた東日本大震災は「天災は忘れた頃にやってくる」という寺田寅彦【1878～1935】の警句を思い起こさせた。

寺田は物理学者で漱石の弟子、『三四郎』の野々宮宗八のモデル。

二十十日 立春から二十十日目。夏目漱石の「二十十日」は、阿蘇山での青年二人が行う会話主体の時事批評が秀逸。哲学も科学も寒き噓(くしゃみ)かな 寅彦



八日 白露【二十四節気】「陰気やうやく重りて、露にこりて白色となれば也」暦便覧より。

九日 重陽の節句(五節句の一)奇数陽の数字の極・九が重なり重陽。菊は邪気を払う長生きの草とされに長寿を祈る日。古代、宮中では菊を酒に浸した菊酒を飲む宴が催された。



十三日 中秋節(十五夜・中秋の名月)薄(すすき)を飾って月見団子・里芋・枝豆 栗などを盛り酒を供えて月を眺めた。里芋の季節なので芋名月とも。

十二日 向島百花園・月見の会 開園時間を21時まで延長し、行灯や雪洞に照らされた幻想的な夜の庭園風景の中、篠笛・箏の演奏や、茶会などが催される。



十六日 敬老の日 高齢者(65歳以上)の人口が21%以上を超高齢社会、日本は2018年に27.7%に。

60歳 還暦(かんれき) 千支がひと回り。70歳 古希(こき)「人生七十古来稀(こらいまれ)」。
77歳 喜寿(きじゅ)「喜」の草書体は「喜」、80歳 傘寿(さんじゅ)「傘」の略字が「傘」。
88歳 米寿(べいじゅ)は「米」の字を分解、90歳 卒寿(そつじゅ)「卒」の略字が「卒」。
99歳 白寿(はくじゅ)「百」から「一」をとると「白」に。

十九日 子規忌 糸瓜忌 獺祭忌 明治期の俳人・歌人。正岡子規【1862～1902】の忌日。



伊予松山生れ。父は松山藩士、母方の父は藩の儒者。東大国文科中退。大学予備門で夏目漱石と知り合う。俳誌「ホトトギス」による新しい俳句を指導、「歌よみに与ふる書」で万葉調を重んじ、根岸短歌会を興す。写生文による文章革新を試みるなど、近代文学史上に大きな足跡を残した。松山の「子規堂」や東京・根岸の「子規庵」など居住場所は名所旧跡として現存。

柿くへば鐘が鳴るなり 法隆寺 赤とんぼ 筑波に雲もなかりけり

二十三日 秋分しゅうぶんの日【二十四節気】秋の彼岸(二十日から二十六日)の中日。煩惱の多い現世の川岸を

此岸(しがん)、悟りの境地・来世を川の向こう岸「彼岸」と呼ぶ。

九月の歌

赤とんぼ 詞 三木露風【1889～1964】 曲 千田耕符【1886～1965】

大正十年(1921)発表。露風は五歳で母と生き別れ、祖父の元で子守の姐やに育てられた。その背中で見た夕焼けの風景。「おわれて」は「追われて」ではなく「負われて」。姐やは十五歳で嫁に、赤貧のため口べらしの子守奉公、嫁入先では農業労働力。母が実家近くの娘を子守奉公に出し、姐やから母の便りを聞く楽しみがもう無くなるという意味か。第一節の「夕焼け小焼け」は幼少の、最後の第四節「夕焼け小焼け」は幾年月を経た風景で、時空を越えた詞に。2003年「日本童謡の会」の好きな童謡一位。理由は「母が歌ってくれた」から。

夕焼小焼の 赤とんぼ 露風
負われて見たのは
いづれか
山の畑
桑の實を
小籠に摘んだは
まばろしか
十五で姐やは
嫁に行き
お里の大よりも
絶えはてた
夕焼小焼の
赤とんぼ
どまつて、いるよ
竿の先

